



シリーズ開始に当たって

H29. 11. 6

こんにちは、住吉小学校の坂井です。3週間振りに響風をお届けします。

新シリーズは、「子どもと付き合う」です。きっかけは、3月に福井県の中学校で担任等の厳しい指導や叱責で生徒が自殺したとされる衝撃的な報道です。痛ましい出来事であり、同じ学校という職場に勤める者の一人として、改めて自らを問い直さなければならない。子どもたちの様子をしっかりと見なければいけない。そのようなことを思い、連載を始めることにしました。

教師の仕事の多くの部分は、「指導する」という言葉で表されることができるよう。すべての教師は、児童生徒をよい方向に伸ばそうと意図して仕事をしているはずですが、しかし、教え方や考え方が不十分であったり間違っていたなら、「指導」は形だけのものとなります。一方、親や教師の役割の一部は、「躱げる」という言葉で表現されます。子どもの生活や学習上の習慣等を一定の型にまで高めることです。躱げも、やり方や考え方が間違っていれば、厳し過ぎる(ときには虐待)と言われることもあります。

私たちは、日々当たり前のこととして「指導」し「躱げ」を行います。善意をもって、精一杯努めます。しかし、こちらの意図したことが子どもたちに届かず、悩むことも多くあります。(もっとも悩みがあるならば、そのときが変化や改善のチャンスだと考えたいです。)

私自身、40年近く教員を続けてきて、また、二人の子を育ててきて、力が入り過ぎていたのではないかと振り返ることがあります。相手が生身の人ですから、こちらの思いだけでは進みません。結果を出したいという思いと相手との気持ちや関係とが混じり合い、ぶつかり合うこと等もありました。

教師と子どもとの関係や親子関係は、もちろん別々のことです。しかし、人と人とが一定のつながりのなかで、関係性を高めながら互いに成長したり思い出を育んだりしていくためには、「共通の土台」もあるように思います。また、子ども側からすれば、自分の成長のモデルが身近な大人(親や教師)である場合もあるでしょう。

そのようなことから、このシリーズでは、学校教育と家庭教育のどちらかに限定するのではなく、そのときどきでどちらかに重点を置いたり、また、双方を絡め合わせたりしながら、進めていきます。大人が子どもの成長に対して、何を大事にしてどのように関わっていけばよいのかを考えていきます。そのようなことから、タイトルは「子どもと付き合う」としました。3～4回程度のシリーズを見込んでいますが、次回以降の内容は未定です。では、進めてまいります。



「傾聴」 ～子どもとの関わりで大事にしたいこと～

振り返ってみると、自分が人に求めているながら相手（子ども）に対してうまく出来ていないことのひとつが、「傾聴」ではないかと思っています。全校朝会の校長講話は「講話」ですから、私が一方的に話をするのは仕方がないでしょう。（講話だって、子どもの様子を見て、それを受け止め修正しながら話さなければならないでしょうが、私には難しいです。）日々、校舎を回って子どもたちと触れ合うことが多くあります。でも、やはり声かけが中心で子どもたちの声に耳を傾けることは、なかなか出来ていないと反省しています。

そのような折、新聞で見つけたのが下の記事です。2週間ほど前（10/24）の新潟日報に載っていたものです。



電話相談員の研修で行われた自分の話の聞き方の癖を確認するための演習＝東京都新宿区

(2017 10/24 新潟日報)

相手に共感する会話を

「長く付き合っているけど、気持ちを受け止めてもらえない。苦しい人がいて困っている」という不満を感じることです。高圧的な態度が嫌で、はよくある。「会話は、お互いちょっと反発したら冷たく当に相手に尊重する気持ちがたれるようになってきて...」。

「傾聴」の姿勢は、周囲の人々が5分交代で向き合い、「年齢は上の方で何か？」、「どのくらいの長さのお付き合いなんですか？」など声を掛けていく。

シニア世代からの電話相談を受けているNPO法人「関東シニアライフアドバイザー協会」（東京都）が開催した相談員の養成研修会の一幕。相談員の養成研修会の一幕。相手の感情をしっかりと受け止めていることを伝え返す。女性はベテランの相談員で、研修生に自分の声の掛け方の癖を自覚してもらう演習だ。人と話をしていて「自分の」と吉原さん。

こうした技術の前提となるのが、相手の話を自分の価値観で判断せず、自分がその人であるかのように考え、感じようとする姿勢だ。「もし悩みを相談されたとしても、コンサルティングのように解決しようとは思わないでください。相手があなただけの会話で求めているのは、自分の考えや気持ちへの共感なんです」と、吉原さんは話している。

傾聴

うなずき、相づち、伝え返す

記事を読み、ハッとした言葉は、「相手の話を自分の価値観で判断せず、自分がその人であるかのように考え、感じようとする姿勢だ」です。教えることも躡けることも、主導権は大人であり教師にあります。しかし、学び手であり育ててほしい側が誰かを考えれば、主体はあくまで子どもです。「大人が、子どもであるかのように考え、感じようとする姿勢」を大事にしたいと改めて思います。

先週の全校朝会では、「新聞の話」をしました。6年生の代表者からは、自分が選んだ記事の紹介とそれを読んだ感想を発表してもらいました。お子さんが、家で話題にすることはなかったでしょうか。今週末には、「もみじ読書旬間」が始まります。学校とご家庭が一緒になって本や新聞に慣れ親しませたいです。校長室前に「子ども新聞」を掲示したところ、さっそく見てくれている子がいました。（11月6日 朝）



